狂い始めた世界

── パリの松尾邦之助（終章）──

江　口　　修

序

長らく松尾邦之助という，パリに住み着いてしまった人たちを除けば，パリジャンとして最も長く活躍した知識人の活躍を追跡してきたが，本稿をもって一応の終章とすることにしたい。続々と一次資料の発掘や復刻が進む中，新しい事実や知られざる交友関係や確執が掘り起こされてゆくに違いないが，松尾正路をきっかけに始まった，兄邦之助の興味深いパリでの転変有為に満ちた，まるで活劇のような波乱万丈の人生の軌跡をたどるのも 1930 年代をもって区切りとしたいと考えるからである。狂乱の 1920 年代，すなわち第一次世界大戦が引き起こしたニヒリズムとその超克を目指したあらゆる分野におけるアヴァンギャルド精神の充溢した時代も，29 年に起きた世界恐慌とその対応をめぐって起きた混乱の中で急速にその熱気を失い，結果，近代国民国家間のもっとも醜悪なエゴをむき出しにした争いが戦争へと向かい始める。幸いジャーナリストとしての身分が保証された邦之助は，藤田嗣治を筆頭に画家や芸術家たちが陸続として帰国し始めるのを尻目に，パリにとことん留まることを選んだ。まず最初に 20 年代末から 30 年代初頭にかけて注目すべきエピソードを二つほど紹介しておこう。

１．ロマン・ロランとの出会いと別れ

同僚の高橋純先生は小樽商科大学創立百周年記念も兼ねた小林多喜二に関する学内研究グループに参加され，フランス共産党の機関紙『リュマニテ』

(L'Humanité) を精査され，ロマン・ロランが同紙上で小林多喜二虐殺を糾弾したというエピソードは事実に基づくものではなく，日本で勝手に作り上げられた伝説であることを明らかにされた。この伝説形成にもっとも寄与したのが，彫刻家高田博厚である。

> 1933 年に小林多喜二の死を悼んでロマン・ロランが記した追悼文が存在するという伝説が生まれたのは，ロマン・ロランを精神の師と仰ぎ続け，小林多喜二ともその思想を共有し得た，高田博厚という 20 世紀の日本を代表する傑出した知性の羨むべき広く深い経験の中に生じた一つの記憶の錯誤からであった。そしてその記憶の錯誤には必然的ともいえる理由があったのだ。その事実が解き明かされた今，われわれが知るのは，―　ここでこそ再度中村雄二郎氏の言葉を借りよう―　多喜二／ロマン・ロラン伝説をめぐって〈事実〉と〈真実〉の間に不可避的に生まれるずれを検証し続けた果てに，〈真実〉は常に高田の心の中にあったのだという，この上なく喜ばしい一事なのである。[1]

精緻な考証と大胆な推論が見事に融合した論文であるが，この結論部分から，加藤周一，中村雄二郎らが代表する，いわゆる岩波系知識人の系譜につらなる，禁欲的あるいはピューリタン的なコスモポリタンの一群が浮びあがってくる。彼らから見れば松尾邦之助のような存在は，軽薄なジャーナリズムのお先棒を担ぐ，問題にもならない存在だったであろう。高田の松尾嫌いは徹底していたようで，松尾の死後，まるで居なかったかのようにその存在が忘れ去られていったことにはこのあたりの人間関係が影響していたかも知れない。

だが，この高田と松尾はロマン・ロランを介してもすれ違っていることはあまり知られていないようである。高橋論文からも高田の思い込みの強さはうかがい知られるが，これは推測の域を出ないのではあるが，高田がロマン・ロランから弟子ともいえる厚遇を受けるようになったことにもこの性格が影響していたとも考えられる。さて，松尾とロマン・ロランの接触は，ロマン・

ロランからの突然の手紙で始まる。

「貴方の住所が不明なまま，この書簡を貴書の出版所に宛て，御送りします。御寄贈の岡本綺堂氏の三部作を面白く拝読させていただきました。綺堂の作はその内容精神に日本の伝統が失はれず，而もそれが現代的な形式に見事に盛られている点で敬服に値すると思ひました。が，今日私が書を貴方に御送りするのは，同じく貴国の現代作家，私の知己倉田百三の傑作『出家とその弟子』に関して御願ひがあるからです。」[2]

「岡本綺堂氏の三部作」というのは1929年に仏語題 *Drames d'amour* で Stock 社から出版された書[3] のことであるが，「三部作」の中身はというと，『修善寺物語』，『鳥辺山心中』，『切支丹屋敷』の三篇である。選択についてはオーベルランとの間でかなりの議論なされたようだ。だが，問題は，松尾もまた記憶違いをしていることだ。ただ彼の場合は手紙類など一次資料の殆どを第二次世界大戦末期ベルリン空襲の中で失ってしまった事情は斟酌しておかねばならないだろう。すると，上に引用したロマン・ロランからの手紙の翻訳は記憶にのみたよったということになりそうである。高橋氏はロマン・ロランが残した手紙も調査されていて，松尾からの手紙が存在していることを確認されているので，これから新発見があるかもしれない。さて，ストック社からの出版は実は1929年の11月であり，次の記述が疑わしくなる。

一九二九年の夏，総持寺の石田義道禅師がパリにやって来た。石田さんは静かな人であまり多くを，私からロメン・ロオランに関した話を詳しく聴取していたが，「じゃ貴方のご案内で，ひとつロメン・ロオラン翁を訪ねませう。」と云い出した。私は石田さんに諾意を表しロメン・ロオランに一筆した上，スイスへの旅装を備えた。[4]

このロマン・ロラン訪問はおそらく1930年の夏のことであったろう。なぜ

ならこの会見でロマン・ロランから「松尾君に『出家とその弟子』の翻訳をお願いした」[5] と言葉をかけられたとしているが，1929 年の夏にロマン・ロランが *Drames d'amour* を読むことはありえないからである。『出家とその弟子』[6] が出版されたのは 32 年のことであり，高田博厚がパリに到着したのは 31 年の春であり，彼がマハトマ・ガンジーを訪ねてロマン・ロランのオルガ邸に赴くのはこの年のことであった。そうすると，ロマン・ロランが仏訳『出家とその弟子』に寄せた序文で「この自由主義の，純真な理想主義者の立派な一群(註，この仲間には，尾崎喜八，片山敏彦，高村光太郎，木村太郎と，彫刻家高田博厚等がいる)」と言及していることもうなずける。おそらく，高田はロマン・ロランの知遇を得て急速に親密度をましているが，その過程で松尾のことを決して良く言うことはなかったのではないか，そう思わせる一文がある。

> 『出家とその弟子』が出版された頃から，私はヂュネイヴの国際連盟で新聞人として働く様になったため，ロメン・ロオランとは自然に疎くなってしまった。『ヂプシィの辻祭り』だとロメン・ロオランが罵倒していたこの国際連盟を脱退して，ひとりよがりの軍国主義のドン・キホウテになった我々の祖国は，全フランスの左翼人から糾弾されていた。パリの共産党紙『リューマニテ』は，ロメン・ロオランの写真を出し，反戦運動と云うよりむしろ反ファシズムの喧伝を初めたが，その頃からロメン・ロオランは作家と云うよりも，どちらかと云えば共産党の闘士になった様な印象を世間に与えていた。[7]

たしかに 1932 年に松尾は読売新聞の正式な記者としてジュネーブに特派されたのではあるが，いくら国際連盟での日本代表部の動きが予断を許さず忙しいとはいえ，ジュネーブとヴィルヌーヴはパリよりも遥かに近い。松尾の語学力と知識ならば，ロマン・ロランは日本の情報源として彼とも付き合い続けることにやぶさかではないはずだ，なにがあったのか。これ以上は推測の域を出ないので黙するべきだろうが，高田博厚と松尾邦之助とがロマン・

ロランという磁場で接近しすれ違ったことだけは確かである。

2.『日仏文化』刊行における坂本直道との出会い

だがたしかに，まじめな左翼の高田からみれば，松尾は無節操なたかり屋に見えたかも知れない。32 年に読売新聞の正式な記者となりパリ特派員に任ぜられ，風雲急を告げる国際連盟の日本代表団に帯同するようにジュネーブへと向かったが，この代表団の松岡洋右の随員に，坂本直道がいた。そして坂本のおかげで邦之助はセーヌ左岸からその活動の場所を右岸へ，シャンゼリゼへと移すのである。そしてこの坂本直道こそ誰あろう，北海道開拓に夢を抱いていた坂本竜馬の血を引き北見に北光社を開いた坂本直寛(なおひろ)の息子すなわち坂本龍馬を大叔父に持つ人であった。直道は一度は北海道坂本家の家督を継ぐが，将来を見込まれてか，姉の夫つまり義兄，彌太郎に家督を譲り[8]，東京帝国大学法学部を卒業後いわゆる「満鉄」に入り海外勤務で世界を駆け回る。1929 年の秋から国際鉄道会議への参加を主要な用務として南満州鉄道パリ事務所に赴任した坂本直道は，帰国しようかというときに満州事変が勃発（1931 年 9 月 18 日）したためそのまま駐在を延期することになった。最終的にはジュネーブへ向かう松岡洋右率いる日本代表団に加わることになる。

おそらく松尾のことをすでに聞き知っていた直道は，読売の特派員として派遣された邦之助とジュネーブでかなり親交を深めたようだ。パリに帰ってからは，

> このデラックスな満鉄パリ事務所で，金髪のパリ美女にタイプライターを打たせ，社用のデラックス黒塗り大型車で…[9]

すでに藤田嗣治は日本へと戻り，正記者になったとはいえ，他社に比べて一段と給与の劣る松尾にとって[10]，直道との邂逅は干天の慈雨に等しい，あるい

はそれ以上であったかもしれない。しかし，考えてみると，永世中立国スイスそれもレマン湖の西端のジュネーブと東端のヴィルヌーヴで，かたや国際的に孤立することを選ぶ日本の国際連盟代表団一行の中で，欧米との戦争は回避すべきとの考えを抱き，そのために取るべき手段を模索する坂本直道と松尾邦之助,かたやコミュニズムへと傾斜を深めるロマン・ロランと彼にとって日本の良心を代表する高田博厚との密度を深める接近が同時に進行していたことはなにやら因縁めいたものを感じざるをえない。ただ，邦之助はこの幸運に驕ることなく，オーベルランとの日本文化紹介という共同作業を着実に進めている。フランス語の能力においては群を抜き，そのフットワークの軽さとスピードでフランス人のみならず在欧の日本人の間にネットワークを築いていた彼を坂本直道が重用するのは極めて自然なことである。直道の狙いとはなんであったのだろうか，

> 満鉄のパリ支社長坂本さんは，竜馬に似た面貌をもち，つねに祖国日本の運命を深憂し，関東軍の押さえがたい専横を強く批判し，このままでゆくと，日本は大変なことになる，と洩らしていたが，ある日，彼はわたしにいった。
>
> 「現在，危機に直面している日本を救うためには，日・独・伊の接近を妨げ，軍の独善を抑えるため，日本はアメリカと組まないまでも，すくなくとも，イギリスに接近しなくてはならない。わたしは，親英政策の具体案として，いま資金を必要としている満鉄は，対英借款をすることを考えている。貧乏国の日本が同じ貧乏国ドイツやイタリアと同盟関係をつくっても，ゼロとゼロの加算でしかない。武力とか，彼ら流の〝日本精神〟をふりかざすだけで，大東亜が征服されると考えているいまの軍国日本ぐらい盲目なものはないよ。そして，わたしは，フランスとは文化同盟を結び，日本に真の民主主義を育てなくてはならないと確信している」といった。[11]

松尾の想起にもとづくものだけに言葉の選択に多少のバイアスがかっているかも知れない。北一輝を評価していた直道が「民主主義」と言ったとはにわ

かには信じがたい。ともかくも，松尾が編集長として活躍することになった雑誌『日仏文化』（France-Japon）こそは，直道が最後まで日本の孤立を避けようと続けた努力の賜物であった。ここで，この雑誌発刊までの経緯をまとめておこう。ここには松岡洋右のもうひとつの面が見え隠れして面白い。

まず，遠い極東の辺境の地満州をほとんど知らない国際社会が日本の軍事行動を侵略とみなす流れになったことに危機感を覚えた坂本は，国際連盟の総会で対日制裁決議が提出された場合のことを予想して，決議案を否決あるいは棄権にまわる加盟国をできるだけ増やすべきと考えた。とりあえずのターゲットはソ連に隣接する小国だとして外交工作を進言したようだが取り上げられなかったようである。同時に滞在中のフランスでは，タルディユー内閣のベシャンを手がかりにフランスの対日同情感をなんとか盛り上げようとする。たしかにフランス上下両院には少数ながら親日派の議員がいたし，なによりパリには松尾をはじめ動ける同調者がいた。これを利用して，両国に日仏（仏日）友好議員連盟のような組織を作ろうとする。一番の問題は日本側にあった。松岡に書簡を送り（1932 年 6 月 27 日付け），この企画を訴えると，同年 9 月 9 日付けで返事が来た。孫引きではあるが書簡の一部を転載しておく。

> 御来示の次第誠に同感に存候。殊に日仏接近は巴里講和会議以来小生の一貫せる主張，漸く我国各方面に於て，近頃其機運熟し来り，誠に愉快に感じ居候。但しこの我国の態度なり，考なりは臨時聯盟総会にて，満州問題一段落を告げ候迄，絶対秘密に御願申上候。但し内密にベシヤン博士の如き人には，含ませ置いて可然かと存候。（下線筆者）[12]

しかし，こうした思惑を胸にジュネーヴでの国際連盟臨時会議に臨んだ松岡の努力も空しく，1933 年 6 月，日本は聯盟を脱退することになる。アメリカ経由で帰国の途についた全権団一行はパリに立ち寄ったが，その折松岡は直

道を呼び出し，坂本に引き続きパリに残り，日本の満州での立場を諸外国に理解させ，さらに対外的信用を回復することを目的として活動するように依頼した。その後この依頼を実行するべく直道は一旦帰国し，満鉄本社との協議の結果,満鉄はパリに新たに事務所を設けて活動を開始することになった。その活動のひとつが雑誌『日仏文化』だった。[13]

松尾邦之助は同誌の初代編集長として迎えられ 1934 年の 10 月第一号が発刊の運びとなる。その後は第二次世界大戦勃発まではこの雑誌発行と，オーベルランとの共訳や，あるいは雑誌等には邦之助単独で日本文化の翻訳紹介とを精力的に続けて行くことになる。

> 日仏文化交流のための『フランス・ジャポン』は，貧弱な会報誌としてスタートしながら，次第の増頁され，内容も充実し，間もなく堂々とした写真入りのデラックス誌になった。
>
> しかし，最も歴史的意味があり，最近，印象深く繙読したのは，この雑誌の最終号であり，1940 年 4 月(つまり独仏戦争の二年目，ナチス軍のパリ占領より二ヶ月前) のものであった。この号を見ると，雑誌の発行主体が，東京日仏委員会となり，アドレスが，満鉄パリ支社(シャンゼリゼ 136 番地)ではなく，日本大使館のあるアヴニュ・オッシュに改められていたこと。
>
> (中略) この文化経済雑誌の主宰者であった満鉄の坂本直道氏も，パリを去り，〝個人と文化の価値〟を無慈悲にふみにじる戦争という〝合法的暴力〟が，全欧州の人間を戦慄させ，世界が狂気の乱舞をはじめる悲劇の瀬戸際まで，よくも辛抱してこんな雑誌を続刊したものだと思う。(下線筆者)[14]

最後まで日仏の関係者からの原稿を集めて刊行され続けた『日仏文化』は，今一度ほとんど空白のごとく扱われてきた 1930 年代後半のパリにおける日本人の活動を探る手がかりとして復刊され，精読されてよいものだと今われわれは思う。満鉄という奇妙な組織，石原莞爾にとっては，バブルを発生させ最終的には戦争によってそのつけを帳消しにすることのできる奇跡的な機

関でありながら，一方でかなり野放図に個人の才覚や野心にその財を投じることを可能にして人材を育てた側面もあるばら撒き金庫も，さすがに独軍のフランス侵攻を前にパリからは坂本直道と共に撤退せざるをえなかったのである。

弟正路だけかと思われていた，邦之助と北海道の繋がりが，出身地だけとは言え，坂本龍馬の末裔である北海道坂本家から出た直道という，当時としては日本の危機の本質を正確に見抜いていた稀代のダンディーとのパリであったのである。邦之助ならではの人物交流として感慨を禁じざるを得ない。30 年代「狂気の乱舞」を始めた世界であるが，われわれが，たとえばシュールレアリスムが急速に共産主義に接近してゆきついには分裂を起こしたことや，スペイン市民戦争でついには反ファシズム陣営がソビエトの党派的行動で分裂してしまったことについて分析し切れていないと思われるが，ここで意外な指摘を紹介しておきたい。

> もともと，多数決による民主主義というのは政治理念ではありえないのです。二十世紀でも，第二次世界大戦前は，デモクラシーなど政治イデオロギーではないというのが一種の常識になっていました。(中略)戦前の日本，あるいはドイツあたりでは，ファッシズムかコミュニズムか，どちらかを採るしかないという二者択一を迫られていると思われていた，デモクラシーを同じ資格の政治的立場とみなす人はままりいなかったと思います。[15]

第二次世界大戦でのアメリカの勝利により「デモクラシー」はイデオロギーに格上げされることになり，さらに絶対視されるようになったため，先ほどの邦之助の直道に「真の民主主義」への希求を見るような錯覚が起こったのではないか。30 年代のアヴァンギャルド陣営での先鋭な政治化の動きにも，やはり理想あるいは「イデア」へと向かう西洋の思考的特質を見て取るべきだろう。高田から見れば，松尾や坂本のような動きは保守反動に加担した許しがたい文化的偽装工作でしかなく，松尾はそのお先棒を担いだチンピラ

だったのであろう。だが，やはりほぼ6年にも亘り出され続けたフランス語雑誌『日仏文化』は左右両極の間でなんとか日仏連携を模索し続けた稀有の試みは，たとえそれがパリでしか許されないという限界を孕みつつも，やはり再考に値するだろう。

終章

さて，松尾邦之助の滞欧時代の遍歴をたどる旅もそろそろ終わりに近づいてきた。まだまだ紹介すべき邦之助の人生を彩るエピソードは多いが，邦之助の目に映った30年代のパリの文学•思想的風景をまとめて，稿をしめくくることにしたい。富岳本社から戦後間もない1947年10月に松尾は『現代フランス文藝史』を出している。網羅的で駆け足で十九世紀および二十世紀のフランス文学や思想を紹介したものだが，この中で二十世紀を4期に分けて解説している。

1）第一期（十九世紀末から1914年まで）
2）第二期（1914―1918）
3）第三期（1919―1930）
4）第四期（1930―1946）

ベル・エポックから第一次大戦までは崩壊し始めていたとはいえまだ古きよきヨーロッパであった。第一次世界大戦中を一つのエポックとしてくくっているのは，やはり戦後のまだ虚無感漂うフランスに留学した松尾にとっては無理からぬところがあるだろうが，ある意味で慧眼でもある。

> 戦争は文化史的に観れば，或意味で空間（原文ママ）の時代であった。一九一四から一八年までの対戦は戦前に意図し予定していたフランス文学の中絶であり，停滞でもあった。だが，別の観方からすれば，この戦争による人間の

苦悶が，人間を新しい方向に発展さすべき一つの動機であり，暗示でもあったとも云える。[16]

そして戦後の「一九一八年から二八年，世界経済恐怖（原文ママ）の見舞う前までの十年間」[17] のニヒリズムから生まれ，あるいはそれを克服しようとする様々なアヴァンギャルド芸術の族生するパリで二十才台を生きた邦之助にとって続く第二次世界大戦までの十年余は坂本直道の日本の致命的な危機をなんとかしようと，蟷螂の斧とも思われるような『日仏文化』誌編集の時代であったが，この時代を観てこう要約している。

一九三三年，ロンドンにおける世界経済会議は，世界に向かってあたかも「もう駄目だ」と匙を投げる様に，会議の無力と失敗を告白した。翌年，一九三四年に大詐欺漢スタヴィスキイの事件があり，全フランスの輿論が沸騰し，ついに，有名な二月六日のコンコルドにおける流血暴動の騒ぎになってしまった。

文学や詩は，人間の関心ではなくむしろ避難の為の存在となり，ヂイドでさへも，筆者に向かって『政治に関心を持たざるを得ない』ともらし初めた（原文ママ）。第一次戦後の精神的不安は，一九三五年頃には呼息塞がる様な現実の不安に変わって来ていた。[18]

スタヴィスキー事件を発端とするコンコルド広場での流血暴動に松尾はジャーナリストの身分証を利用してまさに渦中に飛び込んでルポルタージュしているが，そこで見た大衆の怒りとその発現に大いに恐怖させられ，「第二次世界大戦の間接的原因」[19] とまで見ている。この騒乱により，反ファシスト作家・詩人達が鋭く右翼文学者達と対立するようになった。1937 年になると，アンドレ・ジッドの『ソ連旅行における修正』[20] が出版され世界に衝撃を与えた。ファシズムの対抗勢力と見られ世界に希望を与えていたソ連が全体主義的体制であることをあからさまにしたからである。徐々に進む世情の混乱はついに，

一九三八年には，スペインの女政治家パシオナリアがパリに現れ，リシヤアル・ブロックと協力していた。この年に，音楽家のラヴェルが逝去しているが，葬式人夫のストライキで，彼のなきがらは数日そのままにされていた。この年の七月から，ヨオロッパは，文字通り『神経戦』の時代に入つていた。[21]

知識階級の反戦の叫びも空しく，ヨーロッパは戦争へとその歩みを速めて行く。ちなみに開戦の翌年 1940 年は奇しくもゾラの生誕百年祭で，モンパルナスのクーポールで記念の午餐会が開かれ松尾は山本実彦と小松清らと一緒に出席している。その折ゾラの娘ルブロンと会見したが，その時の彼女の発言をやはり採録している。

「御父さんのゾラは極端に戦争を嫌っていました。どこの国でも，民衆は決して戦争を好んではいません…ただ，支配階級が，自分の政治の行詰りから来る失敗を転嫁させ，その責任のがれるに外敵への憎悪を煽動するのです。ドレフス事件の御父さんの態度でも，みなこうした欺瞞の支配階級への反抗の表れであつたと思います。」[22]

さて，こうした風雲急を告げる騒々しい時代にあって，やはり特筆すべきは，オーベルランとの共同による日本文化紹介の翻訳をコンスタントに出し続けていることであろう。本稿でも取り上げた 1932 年出版の『出家とその弟子』以後も，35 年には友松円諦の『仏教概論』《*LE BOUDDHISME*》と書き下ろしの《*HISTOIRE DE LA LITTÉRATURE JAPONAISE DES TEMPS ARCHAÏQUES À 1925*》さらに翌年には，横光利一がパリを訪れた際，書店に平積みになっているのを見て喜んだという，《*HAÏ-KAÏ DE BASHO ET DE SES DISCIPLES*》，最後は 1939 年に出た《*ANTHOLOGIE DES POÈTES JAPONAIS CONTEMPORAINS*》である。筆者も暇を見てはインターネットでフランスの古書検索をやり，ほとんどを入手したが，今後はこれら共同翻訳の中身についてじっくりと調べてみたいと思っている。

たまたま見つけた雑誌(LATINITÉ)[23]の三年次目，第二号にはKuni MATSUO単独寄稿で，川路柳虹，西条八十そして北原白秋の詩を15編ばかり訳出しているが，いいリズムである。さて，二人が出した最後の訳詩集『現代日本詩人選』の悼尾を飾るのはこんな俳句である。

Mer calme du crépuscule.
Des libellules et des libellules
M'enveloppent...[24]

今ではほとんど忘れ去られた俳人臼田亞浪の作品である。彼は自ら真正皇道派と称した人であるが，そこを知ってか知らずか，邦之助とオーベルランは「夕凪ぎや浜蜻蛉につつまれて」を採った。しかし筆者にお付き合いくださった方は，山本芳水に関しての探索（失敗）譚[25]で「蜻蛉」をどう読むかの話しを思いだしていただけるだろうか，実に偶然とは思えぬほどの見事な暗合ではないか。それにこの句自体は見事な作品である。それにつけても，「蜻蛉」あるいはトンボに「包まれる」情景をフランス人たちは戦慄しながら想像したのだろうか気にかかるところではある。

最後に付け加えておきたいことがひとつ。2009年，その愛書狂ぶりがますます高じてきて世人を驚かせ続けている鹿島茂が『パリの日本人』を出したが，その中で当然ながら松尾邦之助を取り上げて，「両大戦間のパリで，藤田嗣治と並んで日仏の双方から最も名前を知られたこの日本人を日仏交流史のしかるべきポジションに置き直してやる時期に差しかかっているのでは」[26]と再評価を呼びかけている。これからは陸続として松尾とその周辺に関する研究が出てくることが予感される。

注

1　「多喜二とロマン・ロラン：伝説の〈事実〉と〈真実〉」，高橋　純，小樽商科大学『人文研究』第 118 輯，2009 年，p.218。
2　『フランス放浪記』，松尾邦之助，鱒書房，1947 年，p.222。
3　*OKAMOTO KIDO DRAMES D'AMOUR* traduits du japonais par KUNI MATSUP et STEINILBER-OBERLIN, LIBRAIRIE STOCK, 1929, PARIS. 参考までにフランス語タイトルを掲げておく。*Une Histoire de Shuzenji, Le Double Suicide de Toribeyama, Prison des Chrêtiens*，『切支丹屋敷』はかなりフランス人読者を意識した選択であると思われる。
4　前掲書，p.222。
5　同上，p.228。
6　仏語題は *Le Prêtre et ses Disciples*, Rieder, 1932.
7　前掲書，pp.241-242。
8　その後坂本家八代目を継いだ，北海道の山と原野に生きた開拓画家としても著名な坂本直行は彌太郎（七代目，彌直と直道という直系の男子がいながら，長女直意婿養子が家督を継いだ）の次男である。1924 年に北大農学部入学，同時に山岳部に入り北海道の山々を歩きまわる。卒業後は園芸関係の仕事に就き上京するが，1929 年に退社し北海道に帰る。その後友人の誘いで広尾村字下野塚の原野に入植，厳しい開墾労働と牧場経営の合間をぬって，山や原野，そしてそこに咲く花々をスケッチするようになり，画家として知られるようになった。北海道で有名な菓子会社の包装紙は彼の草花のスケッチを採ったもの。
ただし，直道の「若隠居」については，次のような情報もある。

　彌直と妻の白系ロシア人，ニーナ・スピリドノブナが 37 年 4 月に満州の新京（今の長春）で撮った写真が札幌の直行宅に残っている。2 人はその月に結婚しており，その記念写真だろう。
　彌太郎は長男がロシア人と結婚したことに怒り，勘当して分家させた。
　元満鉄欧州事務所長の坂本直道が戦後，甥の土居晴夫にこんな話をした。「彌直と満州で一杯やった。その時，2 人で『彌太郎に勘当された者同士だな』と話し合った」（この情報は下記の URL 上で展開されている『北の龍馬たち　坂本直行物語』，朝日コム，MY　TOWN 北海道 http://mytown.asahi.com/hokkaido/newslist.php?d_id＝0100078 からの引用，下線筆者）

ちなみに同じ URL 上に『北の龍馬たち　坂本直道物語』もあり，その『⑸満州投資 PR「宣伝本部」並みの働き』はまさに松尾との出会いについての記事となっている。また坂本直道へのメッセージの入ったフランソワ・コティの写真も掲載されており，邦之助の活躍ぶりを傍証してくれている。また直道の長女寿美子が覚えている次の発言も貴重だろう。

「世界の国は満州をよく知らない。いろんな世界の会社に進出してもらい，工場を建てる，そうして発展し，みんなが豊かになるのがいい。外国資本が入っていると，戦争を避けられる」（下線筆者）

9 『風来の記』，松尾邦之助，読売新聞社，1970 年，p.188。
10 薄給ぶりについては回顧録系の著作の随所にみられるが，正社員になってからのエピソードをひとつ挙げるとすれば，モーリス・ルブラン翻訳にまつわるものであろう。正力松太郎読売新聞社社長直々の依頼で，凡庸さに辟易しながらも翻訳に務めた松尾は次のように回想している。

> このことで思い出すが，本社が電報でこの探偵ものの邦訳を私に依頼した三日後に，正力社長は文化部長を呼びつけて，
> 「オイ君，松尾の原稿，まだ着かないのか」
> とどなって，催促したという。シベリア便で急送しても，十六，七日を要するのに，執筆を電報で依頼してから三日後に，「まだか？」と催促した正力さんの意気ごみはさることながら，さらに驚いたことには，六ヶ月も連載されたこのルブランの訳文が脱稿したとき，わたしが論説委員の井沢弘にたのんで，読売の薄給で，ひどく窮乏していますから，何がしかの翻訳料を払ってもらいたいのです，と申し入れたとき，井沢から次のような返信がきた。
> 「君の依頼で，正力社長に翻訳料を払っていただきたいと申し出ると，社長は『何いっとる。松尾は社員じゃないか，社員の仕事なんだから翻訳料などもってのほかだ』といわれました。考えてみると，一理あることだと思い，そのまま引き下がりました。悪しからず」（『風来の記』，pp.124-125，下線筆者。）

大正力と呼ばれた正力松太郎のここぞと見たときの熱中振りは有名であるが，その勘の的中することでも伝説的である。だが，あえて東日本大震災における福島原子力発電所の事故による惨劇を見るとき，正力がその勘の鋭さで国策として原子力利用を進めるべきだとして，壮大なキャンペーンを張り巡らしたのだということを忘れてはならない。たとえば佐野眞一，『巨怪伝　正力松太郎と影武者たちの一世紀』（上下二巻，文春文庫）参照。
11 前掲，『風来の記』，p.192。
12 同上，p.199。
13 日本では，「日仏同志会」の設立発起人会が 1934 年 7 月 9 日に華族会館で開催されることになる。そして総会を経てそのパリ支部がパリの満鉄事務所に置かれることが議決された。
14 前掲，『風来の記』，pp.206-207。
15 木田元，『反哲学入門』，2010 年，新潮文庫，pp.72-73。
16 『現代フランス文藝史』，富岳本社，1947 年，p.107。
17 同上，p.113。
18 同上，p.207。
19 前掲，『風来の記』，p.180。この騒乱事件で松尾は初めて「パリ警視総監サイン入りの金属製自由通過許可証」coupe-file を使ったが，それを見せた武装警官は彼に向かってこう言った『よろしい。だが，気をつけたまえ。万一の場合の身の危険は君の責任だよ』。事実松尾記者は『進退きわまった。ふと見ると，海軍省の横に，暗い小穴の隙間があり，わたいしはネズミのようにその隙間になった暗がりの中にかくれ，じっとしていた。』
20 前掲，『現代フランス文藝史』，p.210。原題は *Retouches à mon Retour de l'U.R.S.S.*, Gallimard であるが，訳書としては，最後の『日仏文化』編集長小松

清の『ソヴェト旅行記修正』，岩波文庫が有名である。

21　同上，p.210。

22　同上，pp.212-213。

23　出版社は LIBRAIRIE DE FRANCE であるが，そのほか REVUE DES PAYS D'OCCIDENT とあり，編集長はジャック・レイノー（Jacques REYNAUD）である。

24　*Anthologie des Poètes japonais contemporains*, 1939, Mercure de France, p. 298.

25　筆者著，「しらぬが仏：『松尾邦之助とパリ　その 1 狂乱の時代』補遺に代えて」，小樽商科大学　言語センター広報，2009 年。

26　鹿島茂，『パリの日本人』，新潮選書，2009 年，p.143。